

私が星野立子さんに連れられて初めて行った虚子庵は改築された現在のとは少しちがう古いお家だった。その当時の表門は江の電の線路に直面するせいで閉めたきりで、人の出入りは小さい裏木戸からだった。

その木戸の柱に小包の荷札より小さい表札に（高浜清）との文字も傍に近付かぬと読めぬ小ささだった。しかもその表札の片端が割れて小表札がさらに細まっている。これが有名な大俳人のお住居かとちよつとまごついた。

その木戸から一步はいると、この家の構えに不似合な大きな天井の高い納屋というより木造倉庫のような建物があり、その戸が半分開いていたので、おのずと内部が見えた時あつと驚かされた。

ちようどあの戦中の昭和十九年の冬、すでに食糧も惨たんなるもので、果物も時節の蜜柑一つ手に入りがたく、リュックサックをしょって伊豆地方へ買出しに行かねばならぬ時世に、いま虚子庵の大納屋の天井まで積まれた蜜柑の箱が各地から虚子先生あての荷札をつけたままのを見出して私は思わず「うッー」とうなつて、立子さんのてまえ、あわてて口を手でおさえた。ノドから手の出るのをこらえたのである。

そして庭にまわつて玄関から座敷に通る廊下の前の大株の丈高い牡丹の霜除けがわらではなく古新聞紙で覆われて紐でくくつてあるのを見て、そのむぞうさな素朴さにまた驚かされた。

私はかしこまって虚子先生にごあいさつして、その時代おおかたの作家の小説は不要不急なものとして見放されたので、この手待ちぶさたの折に（俳句）を学びたいと、まことに虫のよいお願いを言った。

虚子はふくよかにあたたかな血色のいい老顔、目もとはある時やさしく、また時として鋭い、声は低く重厚で言葉少くいささかの軽々しさもなかった。

「俳句というものは小説とちがってごく小さい狭い部分を

と指先で小さい輪をつくり、そこをのぞく顔をして「これを見つめることです」と言う。

俳句とは万斛の憂いを蔵してわずかに一語を発するもの この虚子の言葉を（ホトトギス）で知って感動、

句作を試みたい私だった。

「そうです、心のうちに蔵する考えのほんの一部分を描くのです。庭石も土の上にのせたのでは巨大な石も力が無い。土の底深く石の大部分を埋めてその先端をわずかに出すと石全体の力が現われると同じわけです」

虚子門の新人生はこの訓示をいただいた。俳句のみならず（小説）も（文章）もすべてそうかなと考え込むと、また低いしずかな声でした。

「わたしも俳句以外に（小説）を書きました。私はフィクションとかいうウソのつくりごとはきらいで、ただ事実を書く、いわば写生文の延長みたいなもんですがー今でもそうした小説を書きたいと思っています」

虚子作（俳諧師）も（柿二つ）もそうした私小説である。

茶の間で奥さまにお目にかかった。足のご不自由な老夫人はその掘りごたつを離れずに居られる。お茶とお菓子が出された。ある地方の門下から送られた名菓（五万石）とかいう牛皮の淡泊な味が私はとてもおいしく一つを平らげた。帰りに半紙に奥さまが少し包んで下すった。甘味のない折からありがたかった。

先生からは近刊のホトトギス雑詠選集（冬の部）をいただいた。見返しに一句をペンで書かれた。

冬の日は今鎌倉にあり我も

虚子

帯の前に両手を差しはさまれた姿で玄関まで見送られ「句稿が山来たらいつでも見ます」と言われた。

門戸を張らず質素に、そして清福、堅実な生活 父祖の伊予松山藩士の伝統そのままが虚子の家庭に継がれてあると思ったのが初めての訪問の印象だった。

